



排
鑄
世
說

—



今冬より一はこと秋入のまじりけきまじり
 加の金城を去るも千里はちりにて表老
 年中より飛ぶも湯涌とて温泉のほとけ
 うねの山流るゝ樹のまじりけきまじり
 るる所なるもまじりけきまじり
 おもむも枝葉乃まじりけきまじり
 希因先師のまじりけきまじり
 人物徳と題号しけしたる人徳れまじり
 せんもまじりけきまじり



一のありてうち終極なるに仲叔の令叔彦重の
 事件のありしをいひておぼしむるに
 けい佛塔世説と号し之を頻々持ぶらるる
 ことありしをいひて人ありしをいひて利を
 せしむるをいひて世乃心を満く洛東山
 場をいひて天明己の春をいひて
 もれと闌更とをいひて

誂諧世説卷之一

目録

- 芭蕉翁風雅の志を示説
- 蕉翁笠人への教化の説
- 蕉翁義仲寺新奥蔭に説
- 万子翁松別の説
- 能頃蕉翁の令終を説
- 門人蕉翁の辭世を説
- 蕉翁加州金昌寺一宿の説



蕉翁内藤君誄諧の説

万子蕉翁ふ初て對面の説

誄諧世説卷之一

芭蕉翁風雅の志を示説

芭蕉翁え縁行柳に終るらん令城ふ志つゝ杖
 紙体え流くる時小春亭より一夜會合りしにその
 席に客愈ふ海の珠物紙はる経吾友をけくする
 まう多かりし其終ふは會れ事を始りてらん
 翁曰らん人のことさしんづひの程さしんづくまら
 どさんと悟るゝハ大急の伊成のぶくうてらん
 風雅のさびさしんづく紙をせ紙はるまればんづ

めぬとくひうてあふ料味さかき遠くを瘴れらる紙
 活びのるるさるる木のりよしじりたると志のくはか
 活せよるをうらなま一況やかく糸味物厚味豊茶
 こんふまのむささるんやも一かひひて糸と定と
 結いと思ひ冷や命のれ紙とむすうてむさたまひ
 一一紙が紙よりもるん人もくひ糸紙よくちりて思
 り紙のさびをきんド活やな一とさるれさうその
 活ら活の川もなる一茶店も命序のうんくち
 の減一紙みそ紙く一とねらやうなく茶茶紙下くむら

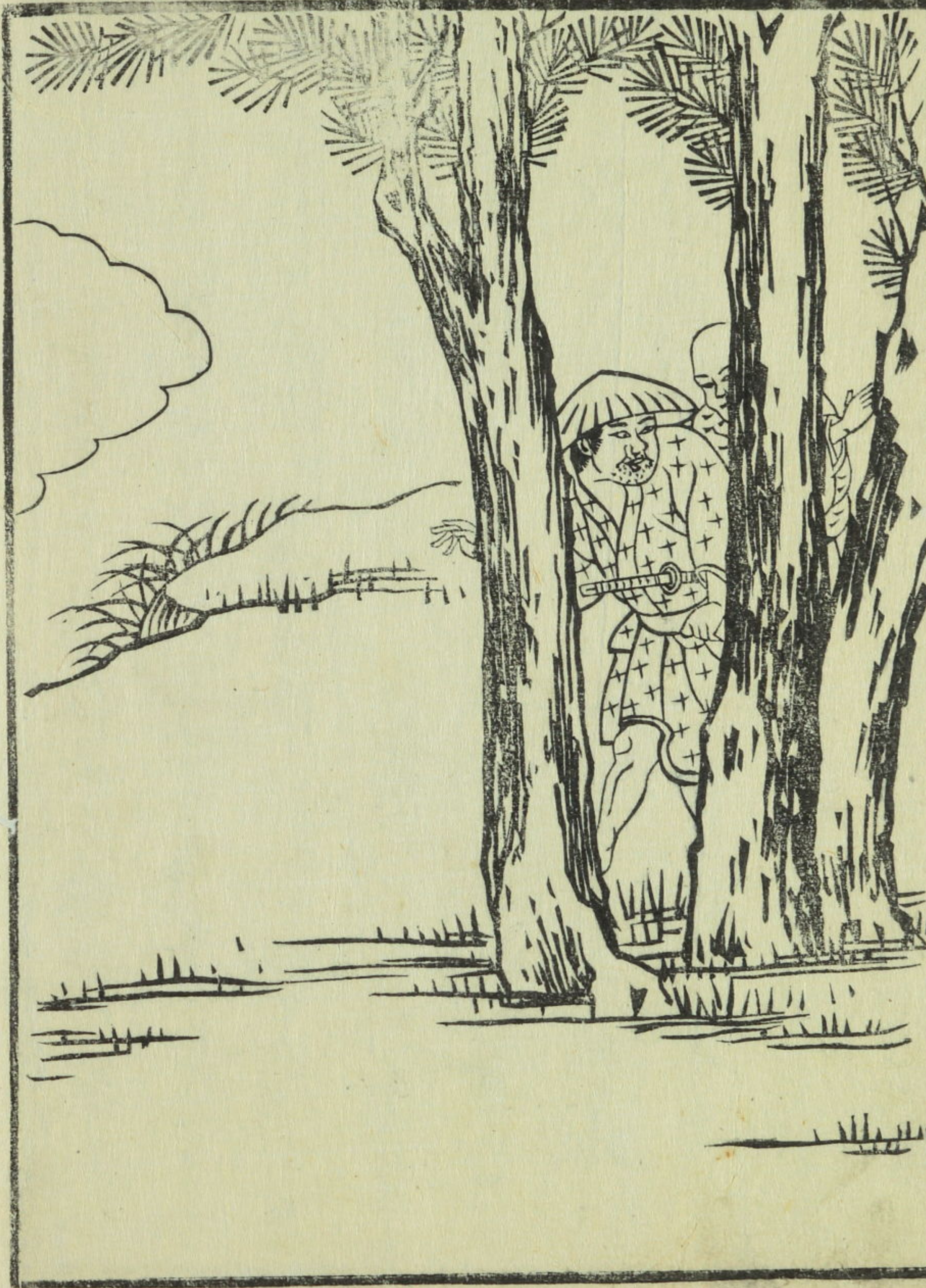
びらう器のむささるの何れももちんやまひま
 翁日席ももや困かればんこれ後をわづ一冷飯ら
 餅さうらむさるべ一とちりたればんやと紙のさ
 とまほいよほし紙を捲き来る其まうけのら紙
 ちうぬを謝るるに翁らるるさるる精礼信止風雅の
 奮制かりらの謝るるもやあし皆くそ一圓居か
 とく茶漬一と捲らうくとおちて先風雅をかくて
 つらほほいんをてて活含の茶有活を費して紙活の
 味をわらうる紙に紙場れ物好くて風雅の席もさ

かりといふなりとありしれり余今成のつくは初を感
 せんよりしていとのびくろを戒め風流ふ移骨とせと
 るふぬく後ともても小枝豊を柳舎のこれ法と
 いふるくもきさる人のあまし事もいひか原教
 戒をせといふく守りぬる故こそ是も人よ翁の訓誨
 比ゆえやうさるんよりて今成の人く初をいひむ
 事成く女へ今の世ももころは人て後成く
 と家の基とほさうりし

白きうしこむしれ味を忘るか芭蕉

蕉翁上人の教化の説

ちや成翁あるとれ世のふら成をうけ人ふるをば
 づりそこはうをぬきたどり草鞋の法を先を一行の
 細枝をたのまに於一足づすみゆきうらに日記もい
 原移しはく小念のふもたどりむだれ経といふも
 てちたう人そくろさ原くか人の本張よりあまる者
 わりいひあを修しとありやう法を其要人目志の
 だれほささ成うう長さお梅よとて人なるかめと
 二三人あうりれあう是らもせよいひし旅人のよめと



色みを加たとい馬舟に東風をうらも又因縁もなれ
 度たやと歩くくくなく教守有れと下恩のうら
 ぶるなとい望人たはさうくとねまうとてほふつら
 ともなく迎ふぬ翁うそれよう杖取もやめて人里に
 した方にぬらぬ杖をたすはたのうらうとてま
 くと家といと執着しぬる我身を感じて

新もころろ夕もほのむがれこか 芭蕉
 かくまへしよ此時の事なりとぞぞ

蕉翁我仲守雜奥瘦の説

ちや紙翁を改るを湖南の義仲守と雜奥瘦のり
 其はく先くは四月朔日なりくそ外面紙張をうりわ
 ずくあまも翁を改る對してうらわの賣を紙改り
 くれが勢いと女のりさ者さきくうんとされはらぶ
 其を改はらむとて郭も唱ふんすそ改の賣とまはす
 るんやそれを人よえんそく改の賣あつたまうとて誰人
 う是紙改むと價を改へるものうりゆべと個なれわ
 實に朝之暮四の縁をこのふとてはするあら郭と賣
 なるもの同く改るべきを改れ倍とるんうとの改ひ

是等の風俗の事一の滅却といふはよくもいふ事人の今言
るはう今の子の風人を志しつゝいふてはう致おはるゝも人の
と致おへんとてうゝの果らぬ力あると返すれぬ致する
ものうゝ何ぞうの紙張賣に知るや

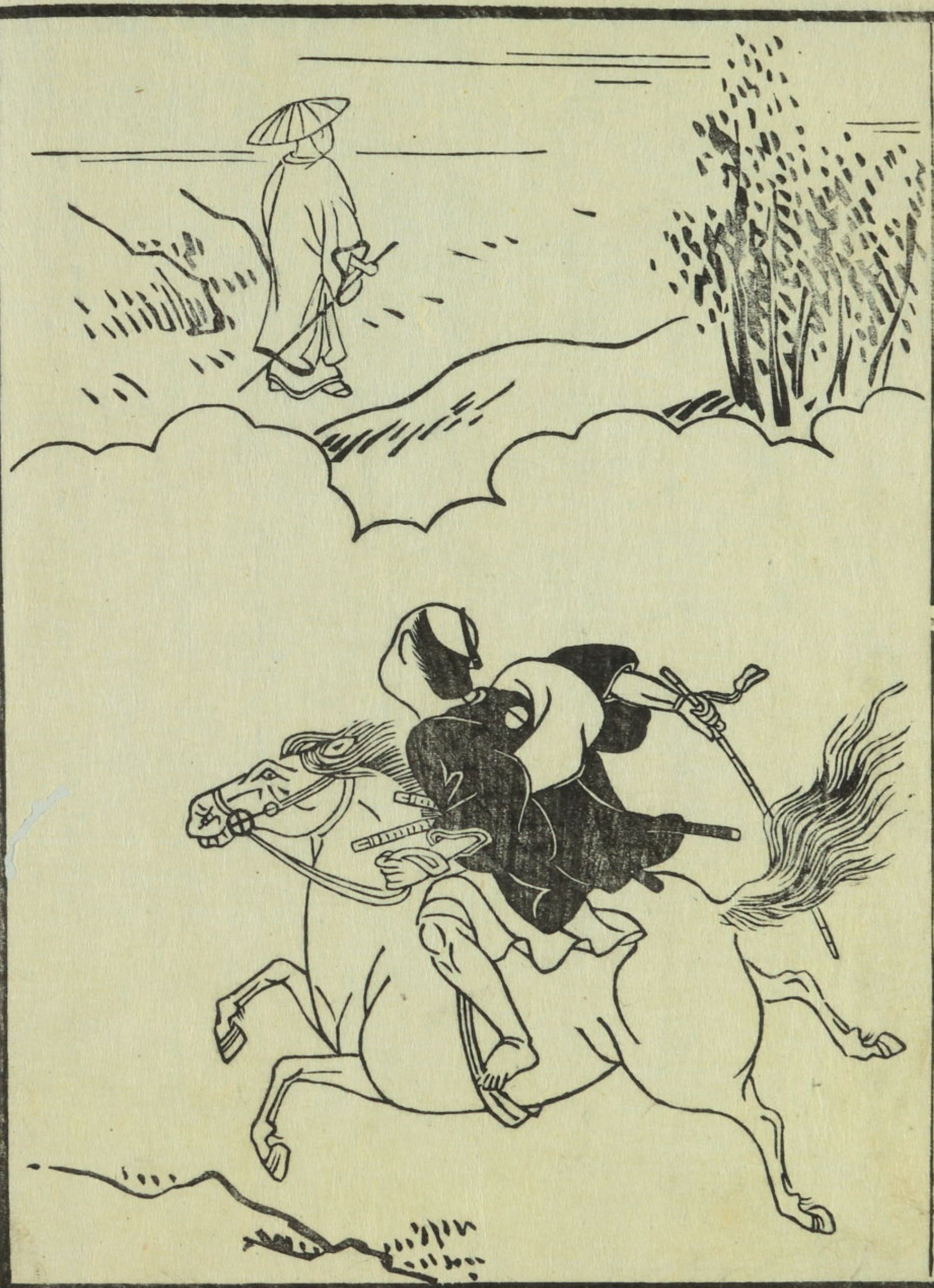
万子翁破別の説

とて致翁小園の脚の時金城の万子遅くしておとれ對面う
致もなるゝ致致れはうて翁の心をうゝて縁さぬお衆返
うけられぬに松江とて進付しうお對面うて馬れぬおむけと
白衣の今とてうゝとてうゝ翁の曰ふに草一統を樂しては為と

おとすれおさうり豊箱布れらるをおめんやまうて今張大監
と惹れ集りてお人の男とて冷ぼとて受給るゝ万子も強ひられ
ともはよゆゝおはらぬをいへるの風俗とてうゝとてうゝれとて

能取蕉翁の命終を参説

芭蕉翁の十好集にて芭蕉さうはひいと加賀小松に連歌師
能順びてよれ死時さうせれ證人とてうゝ院とて十七年に
さうぬまはらうてともう致さうて妻う入るもまかりばし
とてて古人も括きれ作者は多く風流の者りさうやうはえ
ゆゝ然るゝ風俗とてうゝ者八十年とてはらばらうてうゝ一翁乃



牙はうろくし終一車け程多しう〜く〜く〜
 とし〜終多る誠小一通〜〜信能の者の志と斗等と
 人の同急と〜〜よ〜〜〜と〜〜と〜

門人蕉翁の辞世と為説

芭蕉翁終馬の初と捲るふ〜〜と〜〜と〜
 辞世の事と為の〜〜と〜〜と〜
 生よ口と〜〜と〜〜と〜
 ち〜〜と〜〜と〜
 ど〜〜と〜〜と〜

訓とくごんきさくもの色

蕉翁賀加全昌寺一宿の説

芭蕉翁れく乃知通のうら加州大聖寺の全昌寺
とつみちさく

庭掃て出るや寺ふらる柳

け白のけみ故めく白さるをわぬ曾良けちる一宿
に故ふ芳名を稱してかくハヤ子種ぬと見え世説徳
行篇に郭林宗ハ方正の士うて逆旅ふやどる事
の程へるさくどを亭を掃除して過りそる

あるは源旅くけわうさほとるて則ち郭林宗が
庭さるなるを和知さくさる翁け故に成とくしてらる
柳に對して故ふ曾良やどるたる縁を感慨あり
しと是を語句ふらるる白さるべし俗中の説
るらるる中にして翁の言やどるに終る行け
種さるるさくさる者わもと翁のけ白意其外まふ
性ふの白外と成りて考ふとばらてとじきさる
るねし成るる事ハ知乃の書ふゆづりて終る

若緑集ふ翁塚にて

かみみふて知らばけりとのどい 曾良

蕉翁内藤君誹諧の説

くや成翁の時内藤露沾其の由え一石終く
俳諧ありたり主君ありとらう烟草を嗜ひ終く
故に翁もその序をていたをを看詰りて其角も
其序をけりぬあつて翁もつてたまは清誓の海流風
流をりて中をよとんあつて威権も物もかゞばる
位もも屈もなぐらふとされと今日内藤君の序序ふ
て烟草を看詰らばらう一編のつてつらんう小舟

是と惑ひぬと難む翁莞尔とて曰は疑ハ俳諧城
何のそを先ふと取とつてつと女へざらぬあり夫俳諧
ハ小技なりといふもよく用る時ハ一及なり志う六
風流のうらうも豈礼節を忘るべらや法城破れ
とともく海流ともらふ禁射の徒るり繁城省て
ゆ流とまきくらハ頌愚の倍るり徳行の君子六上
浪者れうとするふらふは今日内藤君の雅逸に
烟草を禁うたらふ端ふあつて禮るりいんとされ
ハ紙一介乃乞丐紳なる控坊主といふも風雅乃

乃ふ遊ひ塵尾を握く二三子のとふら是とて
二三子象上宗匠の偽名をゆるとけ故小露法
君の孫をくけりて嬉笑とささるる紙袋の志く
夫人は例としてを忘ぬひ給ふるをといは人を
蔑ふるものうして趙高が鹿とりて馬ふすの
罪を免つるは象が烟草と名する礼なり
孔子のことばも志づく後を行者ら世人縮りと
云との流るう嗚呼古今の習俗るやとて歎息
らふ其角たふ愧て背汗して返ぬと今思ふ

礼と諂と紛も安く言邁と象候と彷彿をり終
乃者是をくくはまて氣象は高上なるく奉
止ハ失礼を顧だし一翁の細道は抑湯殿山禪
定の時乃紙縷袈裟今に沙して拈拈増位山乃
風庭堂ふわり是つてこれものては翁ハ佛頂禪
降に嗣法の人かり志の終を何ぞかゝれ細籠
かりり冷らん体は紙を討の小拙もて終も
あつた冷入ハを時小意トを信よたいてそ礼節
志も冷るるれありわぶるもな紙のりる言

うゝて其徳のうゝゝゝゝ金高のうゝとてさび

万子蕉翁小初て對面の説

芭蕉翁え孫の以小國の抑のころ万子はどめを
對面ありし時万子曰翁を諸國小門人しりし
其道の融通ハ事足りぬしバ家ハ方外と成
てありはく能階をち護とてしり翁も是を
うろつき治ふとみんそとバのわやまごど終り
小校秋乃坊が寤急を救ひあつハ緒國の行抑
のわどと成る金城乃路人を遊ばしえけ乃

けり一人とぬまふとぞと終ハ蓮二法眼も万子の
事を稱して我なふ恐とありと獅子物ねふち
もく終ハ推の海切と稱ふしなれがあら又蓮こ
房が本朝文鑑も翁のなふ万子素書ありし
とありせり世の人万子の蕉翁の門人十哲の下
して道を修六本死切と傳くしりまてさつと終
そのありたるを傳りしりちふにせりとて翁のな
り終りし古書よひしりたり

岩踏く一目くのりくは万子

